

# 日本の高校・大学生が韓国の歌を歌う 「今でもくちずさむほど、胸に迫る曲」

戸田志香



フルートと歌のための「韓国童謡外レ」。合唱部の生徒たちは全員朝鮮半島の民族衣装。

日本と韓国の高校生による声楽のコンサート「響けよ 歌声」。2017年から19年まで、日本と韓国で交互に開催されてきた。1年目は国立音楽大学付属高校、2年目は韓国・京畿道にある桂園芸術高校、3年目は千葉市と習志野市で開催された。ところが、新型コロナが世界中で猛威を振るうなか、2020年と21年はやむなく中止に。しかし、広がり始めた日韓の響きを消すことはできないと、日本の出演者が韓国の歌を演奏するコンサートを開催した。

## どんな国の人ともつながる

韓国の歌曲「河を越え 春が来るように」をタイトルにした音楽会が3月27日に開かれた。韓国の春にちなんだ歌がオーケストラに、2台のチェロとホルンに、歌とフルートにと、さまざまなスタイルで編曲されて演奏された。出演は千葉県立津田沼高校オーケストラ部、合唱部などであった。

アリラン アリラン アラリヨ  
アリランゴゲロ ノモガンダ(アリラン時を越えていく)

朝鮮半島の民謡「アリラン」が女声二部合唱とピアノで演奏された。「ピアノと歌のかけ合いがまるで時を越える風のように、それが勇ましくて美しく……、涙が出そうになるほどだった」。合唱をした生徒の言葉だ。初めて朝鮮半島の民謡を、それも初めての韓国語で歌った。何がこうまで生徒の心を捉えたのだろうか。歌詞だろうか。旋律だろうか。

「河を越え 春が来るように」は、心惹かれる旋律の中に強いメッセーが感じられる歌だ。オーケストラ版の編曲で演奏されたが、曲と高校生たちはまさしく一心同体になった。「今でもくちずさむほど、胸に迫ってくる曲」「韓国の曲は美しく、演奏していて心地よかったが、中でも『河を越え……』が好きになった」。この曲で始まった音楽会は、1曲目から聴衆を韓国の春へと導いた。

**違いを認めて尊重し  
受け入れるのが交流**

演奏された曲は日本では全く知られていない。高校生たちには、なぜ韓国の曲を演奏するのかというためらいがあったであろうことは想像に難くない。韓国語は読めないし、韓国の音楽なんて知らない。ところが見えない音の力はすごい。渡された譜面にあるのは万国共通のおたまじやくし、音符だ。読めるし、音は出せる。その音が弦、管、打楽器など、異なる楽器の音

と合わさる。すると見えてくる音があり、その音の語りかける声が聞こえてくる。それは韓国の言葉、詩から生まれた音だ。歌だ。見えない音から始まった、韓国と高校生たちとの出あいは、もっともっと広がっていく。

「交流って何だと思っ？」という私の問いかけに、オーケストラ部のアイオリンパートの生徒はこう答えた。「自分たちと相手の違いを認めて、尊重し受け入れること。二つ以上の河が交わって海へ流れ出

て、同じ方向へ向く」。もう一つの問いかけ「日本と韓国に、どんな音楽の橋をつくりたい?」には、「同じ曲を好きになれたら、それはどんな国の人ともつながいでくれるのではないか」と答えた。音楽会の最後は出演者全員による「韓国」あの雲の流れ行くところ〜日本〜浜辺の歌」の合唱だった。全く異なる言語の歌が交わりながら、お互いを認めあつて歌い上げられていく。新しく息づいた歌の響きは海に、いえ満席の

## 同じ曲を好きになれたら



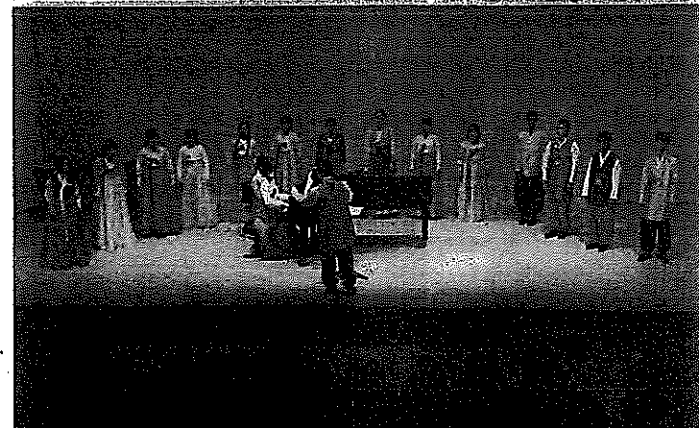
響け歌声の演奏を応援します、ファイト!!  
日韓高校生コンサートで2019年来日した韓国の高校生がビデオメッセージを送った。

会場に流れていた。英語では exchange、meeting、friendship という「交流」。なんて多様な広がる広がりを持つているのだろう。今回の音楽会は、私にそれを気づかせてくれた。認め合う。出あい。友だち。新たな交流。広い交流。さあ! 次の音楽会に向かつて進んで行こう。

写真提供/戸田志香  
とだ ゆきこ・音楽家、「響けよ 歌声実行委員会」代表。1984年度韓国政府招聘留学生として漢陽大学大学院で韓国歌曲を研究。韓国の歌の普及に努める。



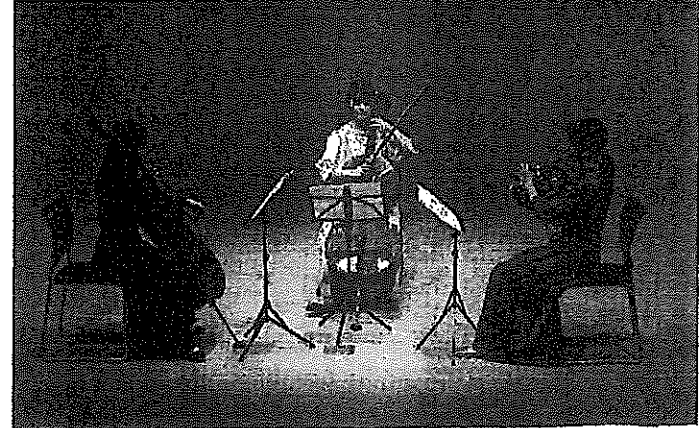
2019年の日韓高校生コンサートに出演した元高校生たち。現在は音楽専攻の音大生。1曲ずつ歌を披露。



会場を包み込むような「アリラン」の合唱。



オーケストラ版に編曲された韓国の民謡「鳥打令(セタリョン)」を演奏する生徒ら。



2019年に千葉女子高校オーケストラメンバーとして日韓高校生コンサートに出演した3人が、チェロとホルンで演奏。